

負ずる事甚多し、近江國蒲生郡、武藏國橋樹郡、遠江國榛原郡など是なり、今此志太郡は其名の元なる志太村を始として、夫より西北の方皆山に傍たる村里にして、またと云ふ草至て多し。

〔駿河隨筆〕上小志太郡 止 駿 百六十一村

北自宇津山峠、西大井川除限、南藤枝之驛、中割西之方、東岡部驛ノ入朝比奈ヲ限、西宇津山際ヲ限、

〔駿河國新風土記〕一郡の事

益津郡 古書皆作益津、延喜式作麻賤、後世諸書多作益津、郡名もとやきつの郡なり、吳音釋轉して、やきの假字に用ゆ、頭吳音ヅ濁音なり、後に焼と云辭を忌てましづと呼、終に頭の字を改めて

津の字を書しなり、

〔駿河隨筆〕上小益豆郡 麻賤 三十二村

南東海際限、北自宇津山、當目山ニ限、西大井川際ニ限、

〔日本書紀〕七景行四十年、是歲日本武尊初至駿河、其處賊陽從之、欺曰、是野也、麋鹿甚多、氣如朝霧、足

如茂林、臨而應狩、日本武尊信其言、入野中而覓獸、賊有殺王之情、王謂日本武尊也放火燒其野、王知被欺、

則以燧出火之、向燒而得免、中略故號其處曰燒津、

〔古事記〕中景行故爾到相武國、武尊日本之時、其國造詐白於此野中、有大沼、住是沼中之神、甚道速、振神

也、於是看行其神、入坐其野、爾其國造火著其野、中略於今謂燒遺也、

〔古事記傳〕二十七燒遺、中略萬葉三に、燒津邊吾去しかば、駿河なる阿倍の市道に逢し兒等、トコラはも、

神名式に、駿河國益頭郡燒津神社、今も燒津村と云もあり、野脇ともいふ、野燒和名抄に、同國益頭豆郡益

頭万之郷と見え、かの風土記にも麻賤郡など書れど、益津は音を取れる字にて、即燒津なり、此事

谷川氏も云り、頭字音を取れば、益もヤクノ音を轉じてヤキに用ひたるなり、然るを麻豆とし、云は、後に燒と云こと、益もヤクノ音を轉じてヤキに用ひたるなり、然るを麻豆とし、益もヤクノ音を轉じてヤキに用ひたるなり、然るを麻豆とし、

るにもあり、